

参考資料

参考1：アンケート調査にみる保存再生活動の6つの共通課題

参考2：さまざまな水文化

参考3：水文化の保存再生活動

参考1：アンケート調査にみる保存再生活動の6つの共通課題

アンケート名：『水文化の保存・再生活動に関するアンケート調査』

調査主体：国土庁水資源部

調査対象：特定農山村地域、振興山村地域、過疎地域、半島地域、離島地域に指定された2,108市町村

調査方法：郵送留置方式・自記式

調査期間：平成11年11月20日から約1ヶ月間

回収状況：636市町村（うち14自治体は団体名不明） 30.2%

共通課題1「流域圏単位の総合的な活動展開」

環境関連の保存再生を進めるためには、河口～涵養林の流域圏全体で、水循環や生態系連鎖等の影響を考慮した活動が不可欠といわれる。しかし、現在の活動の多くは行政区域単位であり地域間の横の連携は殆どみられない。また、水文化関連の保存再生活動も、水質改善等の環境関連の活動と連携を図ることが重要であるが、目的を絞った活動が多い。今後は、流域圏単位の組織を作り、分野横断的な活動を進めていくことが必要である。

共通課題2「住民と行政との役割分担と連携」

水文化関連の活動は、住民と行政との連携が図られていないケースが多い。今後、流域圏での総合的な活動を展開していくために、行政と住民等の各活動主体の性格や保有資源を見極め、地域ごとに適切な棲み分けと連携を強化していくことが必要である。

共通課題3「画一性を払拭し地域特性を生かした活動展開」

これまで、住民活動、行政活動とも、全国画一的な運動が展開されることが多かった。今後は、地域特性を十分考慮し、限られた資源を適切に配分したオリジナルな活動を展開する必要がある。

共通課題4「水文化を継承者の育成」

多くの地域で水文化の継承者が少なくなり、また、若年層の流出等により水文化を継承・伝承していくことが困難な状況になっている。今後は、直接的な保存再生活動の充実のみならず、継承者の育成を課題と認識し、行政等が支援する体制づくりが必要である。

共通課題5「住民参加を促進する工夫」

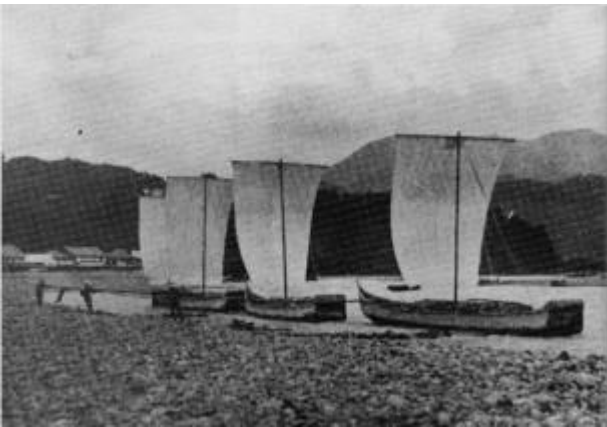


今後は、活動に住民の参加を促進させるような仕組みが必要である。イベント化等の直接的な手段に加え、環境教育や啓発活動の展開により、水問題は住民自身の問題であるという意識づけが必要となる。

共通課題6「日常的、予防的な活動展開」

活発な活動の契機となるのは、渇水等の緊急事態を経験し、生活レベルでの危機感を地域社会全体で共有した場合である。今後は、緊急事態を経験しなくとも、予防的に活動に取り組むことが必要である。

参考2：さまざまな水文化



川舟

場所	名称	概要
静岡県 大井川	高瀬舟	<p>大井川流域の輸送・交通は古くは舟運が中心で、下流部では帆のある「高瀬舟」が、上流部ではやや小型の「うかい舟」が利用された。上流部では出材がさかんで、材木を1本1本流す「川狩り」と呼ばれる搬出方法で流送が行われていた。しかし、昭和初期の大井川ダムの建設と大井川鉄道の敷設により、こうした出材は鉄道による運材に変わっていった。</p>  <p>(資料：本川根教育委員会「ふるさと本川根」)</p>
山口県 岩国市	なくわ 南桑船	<p>地域の水運の中心をなした錦川は中流の行波に藩の米蔵が設置され、その周辺の年貢米を収納していた。これらの年貢米や上流域（萩本藩領）からの薪炭、こんにゃく、山代紙は、錦見の城下町や今津の萩倉へ水運を利用して運ばれていた。当時、南桑を拠点として城下町との間で生活物資を輸送する船は「南桑船」と呼ばれた。錦帯橋下の河原には、船頭が仮宿を組んで宿泊し、独特の景観を生みだしていた。</p>  <p>(資料：http://ww2.enjoy.ne.jp/~h.kurata.co/jpeg/photo2.jpeg)</p>
高知県 四万十川	せんば 舟母	<p>舟母とは四万十川で長く使われていたほかけ舟の名称。中流地域から、下流の流通拠点中村まで薪、墨や木材を運搬していた。中村からは、土佐高知や大阪へと転送されていた。昭和20年代頃、陸路発達と沈下橋の建設により航行が困難となり衰退していった。舟母は、モノの輸送にあわせ、中流域に大阪や土地高知の情報を伝える役割を果たした。</p>  <p>(資料：野本寛一「四万十川民族誌」)</p>
福岡県 犀川町	ひらた船	<p>「川ひらた」「ひらた船」と呼ばれる川舟は、江戸から大正にかけて遠賀川、堀川の輸送手段として活躍した。浅い川で運送可能なように、喫水が浅く、船べりが広いのが特徴である。この間、輸送物資も米や雑貨から石炭へと変化していったが、川は、次第に運送路として使用されなくなっていった。現在は、かつての勇姿を偲ぶのは困難になりつつあるが、県の有形民俗文化財として指定されている「ひらた船」は、長さ10m以上、積載量は6tを超える。</p>




廻船業

場所	名称	概要
山口県 岩国市	尾州廻船 内海船	当地域は江戸時代末期から明治時代中頃まで廻船業が盛んであった。尾州廻船内海船といわれ、買積方式により江戸～瀬戸内地方を中心に、米や肥料などを輸送していた。「戎講」という組合をつくり運営していた。

木材流送

場所	名称	概要
静岡県 大井川 流域	てっぼうぜき 鉄砲堰	<p>大井川上流西俣川の支流小西俣では戦後遅くまで「てっぼう」が活躍していた。堰が切られた瞬間に、ダムにためられた材木が濁流と共にすさまじい音を立てて流出される。川狩りのシンボルは、この鉄砲であった。丸太を組んだ堰堤で川水を止め、そ堰を切って一度に放流される流水の力でいっきに押し流す方法である。</p> <p>明治の中頃から昭和初期にかけて盛んに行われ、大井川源流部では昭和30年代まで続けられていた。</p>
		 <p>(資料：本川根教育委員会「ふるさと本川根」)</p>
熊本県 多良木 町	球磨川流域 の「水の道」 「川の道」	同町は、日本三急流の一つ球磨川上流に位置し、近世～近代には球磨川を「水の道」として、筏を組み、良質の木材を提供していた。かつて、林業は、隆盛を極めていたが、後継者不足と価格低迷のため、現在では、林業の経営は極めて困難となってしまった。
新潟県 守門村	きろ 木呂流し	奥山より伐り出した燃料用薪「木呂」を切り出した現地の沢、川へ流すことにより、町場へ輸送した。「木呂流し」という。
青森県 岩崎村	筏えもの	岩木山からの切り出し木材を、松神の浜から停泊した船まで筏で運ぶ。切り出し木材を仕上げる人を「筏えもの」と呼ぶ。
徳島県 木沢村	ひよう・ 流し	<p>古くから林業が盛んな地域である。道路のない頃は、谷川の水を利用し堰出しや鉄砲堰により木材を川下へ流した。本流からは1本1本トピ口を打込み流していた。これに従事する人々を「ひよう」または「流し」と呼んでいた。</p> <p>10km下流の隣村からは筏に組んで2～3日をかけて、河口の製材所地帯に流送した。</p>
		 <p>(資料：徳島県木頭村)</p>


伝統漁法

場所	名称	概要	
長野県 諏訪市	氷上漁法 やっか 屋塚	冬季結氷前に三つだめの法で位置を決め、2m位の湖底に径15～25cm位の石を300～400個沈め、鮒・えび等の冬ごりの場所にする。結氷を待ち氷を切り、周囲に簀(す)を張り巡し、石を上げて魚を追い出し網で掬う。	 <p>(資料：諏訪市博物館)</p>
和歌山 県古座 川町	火振り漁	予め、川を横断するように網を仕掛け、夜、舟を出し、舟上でかがり火を振る。アユは、水面に映る火の帯に驚き逃げまどい、網の中に追い込まれる。夏の風物詩。	 <p>(資料：中村市観光協会)</p>
高知県 四万十 川流域	ゴリのガ ラ曳き漁	50～60m超のロープに数百個のサザエ貝殻を結びつけ、縄の両端に舟と人を配し、予め仕掛けておいた四つ手網の方向にロープを引張りゴリを威して群を追い込む。追い込む際の貝の「ガラガラ」音が漁名の由来。	 <p>(資料：中村市観光協会)</p>
愛知県 稲武村	梁漁	業面では毎年8～10月にかけて根羽川(矢作川支流)に梁がかけられる。過去には矢作川でも梁漁が行われていたが現在は行われていない。	
埼玉県 皆野町	ウグイ漁	国指定重要民俗文化財「荒川水系の漁撈用具」の収集地である皆野町は、荒川を中心とした漁業が古くから発展してきた。山女魚、岩魚をはじめ、カジカ、ウグイ等の多彩な魚種が漁の対象となり、多様な漁法も発展した。	
鳥取県 美朝町	ウグイ漁	寒くなる頃に産卵で集まるウグイを捕獲する「ツキ」という漁法がある。「ツキ」は小石により楕円の形を作ってウグイを取る。この伝統漁法は、現在では見られない。	

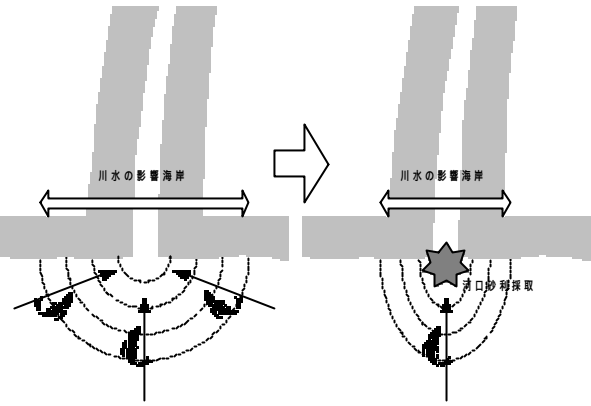
次頁へ続く～伝統漁法

場所	名称	概要
熊本県 五木村	ホコ突き	村の中心を珠磨川の支流川辺川が貫通しており、川漁も盛んであった。大小の支流は、村人の遊びの場として、また食料の一部となる魚介を採るところでもある。漁の方法は、投げ網、ヤナ漁、ホコ突き等がある。
大分県 佐伯市	シロウオ 漁	番匠川に古くから伝わる漁法で、笹垣を並べその笹垣に舟を寄せ、舟の上からシロウオを三角形の大きな網に誘い込みすくう。
宮崎県 東郷町	ちゃん掛け ほか	漁業の方法で鮎を「友釣り」「ちゃん掛け」「堰」といったやり方でとらえている。
高知県 四万十 川流域	ウナギ、エビ の柴づけ漁	河口近くで行われ、長さ1～1.5mほどの葉のついた枝や笹の束（柴）を一昼夜以上川に沈めておくと、ウナギや川エビが格好の隠れ家だと思い中にもぐり込む。そこで、獲物が落ちないように慎重に柴を水際まで上げ、たも網をあてがい揺すり落とすという仕組みである。
		火振り漁、友釣り、ノボリオトシ漁、ウナギのヒゴ釣り、ウナギのスズクリ、ウナギのコロバシ、ウナギのイシクロ、ハエ縄漁、エビ玉漁、カノウエ漁、テヌイエ漁、他


養殖業

場所	名称	概要
高知県 中村市	アオノリの真 養殖	水と潮水が混じる地に育つ、といわれるアオノリは、四万十川下流中村市で古くから栽培されてきた。12月～3月まではアオノリ、そしてアオサが3・4月に採取された。
		
		(資料：国土庁「水の郷百選」)
鳥取県 関金町	ニジマス養戦 殖	後造林等積極的に行うとともに、谷間の湧水を利用したワサビの栽培は各集落で行われ山間の開けた台地では椎茸、手を切るように冷たい沢水が大量に流れる下手ではイワナ、ニジマスの養殖が行われている。
		
		(資料：鳥取県関金町)

次頁へ続く～養殖業

場所	名称	概要
静岡県 大井川 流域	魚の遡上	<p>大井川には昔から鮎やウナギが遡上してきていた。ところが、河口域での盛んな砂利採取のために、河口床が下がり、川水の被影響海岸が大幅に縮小した。この結果、河と海とのつながりが変化し、遡上魚である遡上が川の入り口部分で阻まれ、アユやウナギ等が大幅に減少した。</p>  <p>(資料：㈱三和総合研究所 作成)</p>
北海道 標津町	鯉の生産地	1700年代、後期の江戸時代から、鮭や鯉を獲る「場所」として拓かれ、今日では「日本一の鯉生産地」としての地位を得るに至った。鮭は言うまでもなく、湧き水の多い清流で産卵し、ふ化した稚魚も清流を下って海へと達し、往復1万キロの旅を経て、約4年で「母なる川」に帰る。
新潟県 朝日村	鮭の養殖	三面川では、昔から鮭の養殖を実施し、生活の資金源としていた。
新潟県 新穂町	鱒の養殖	当地域では加茂湖という汽水湖があり「かき」の養殖が産業の一つとなっている。
長野県 佐久市	錦鯉の養殖	市内一部地域では、江戸時代に豊かな水を利用して水田養鯉を行っており、遠くは江戸・草津までも桶を担いで出荷したとされる。

棚田

場所	名称	概要
新潟県 小千谷 市	魚沼コシヒカリ	小千谷市は日本一の大河信濃川が市の中央部を流れ、また県内でも有数の豪雪地帯であることから、その大量の雪は豊富な地下水となり、湧き出した水は日本一の錦鯉産業を育ててきたほか、魚沼コシヒカリ、清酒、米菓など様々な特産品を生み出している。
高知県 梼原町	千枚田	<p>町内神在居地区にある棚田は「耕して天に至る」といわれ、文字通り、石を積んで作られた棚田が険しい山の上の方まで続いている。棚田は、いつしか「千枚田」と呼ばれるようになった。ところが、地域の過疎化と米の価格の相対的な低迷により、作り手がいなくなり、最近では耕作放棄も見られるようになった。しかし近年千枚田オーナー制度による都市との交流等により保全活動も行われつつある。</p>  <p>(資料：高知県梼原町)</p>

次頁へ続く～棚田

場所	名称	概要	
熊本県 菊池市	菊池米	菊池は江戸時代には「菊池米」として、全国的に有名であり、菊池川下は俵が積み込まれ、中央との取引が行われていた（中世の頃は中国との交易も行われていた）。	
長野県 更埴市	姨捨の棚田	<p>「日本の棚田100選」にも認定され、姨石、長楽寺、四十八枚田地区は国指定名勝。市ではこの棚田を保全し棚田の景観を将来に引き継ぎ、都市と農村との交流、地域活性化のため、平成8年度『棚田貸します制度』を発足させ保全につとめている。</p> <p>（資料：http://azumino.cnet.ne.jp/country-road/koshoku/index.html）</p>	
宮崎県 日南市	酒谷の棚田	同市の酒谷地区では、棚田を現在でもそのままの形で残っており、農水省「日本の棚田100選」にも選定されている。春にレンゲ祭りなども開催し、県内外から多くの観光客が訪れ、現在では、地域振興の一端を担っている。	


地場産品

場所	名称	概要	
静岡県 かわね郷	川根茶	静岡県大井川流域かわね郷では、大井川の朝霧を利用して茶の栽培が盛んである。	
長野県 安曇野 豊科町 穂高町 明科町	わさび田	安曇野の一带は北アルプスの雪解け水からなる河川と地下水に恵まれた地域である。特に犀川、穂高川、高瀬川の合流地点は一大湧水郡であり、水温変化のない湧水を利用したわさびの栽培は生産量日本一を誇る。表流水は水田に、地下水はわさび田に、排水はニジマス養殖に利用されている。水が循環利用されている。	

次頁へ続く：地場産品

場所	名称	概要
高知県 吾北町	コウゾ・ みつまた さらし場	本村は川を利用したコウゾ・ミツマタの栽培が盛んであった。蒸して剥ぎそいだ皮を、川の「さらし場」で白く洗っていた。また、水車は米をつき、キビ・ソバ粉等をひくなど、水は暮らしに欠くことのできないものだった。

手漉き和紙


場所	名称	概要
長野県 長門町	立岩紙	当町は江戸時代から手すき和紙（立岩紙）が盛んであった。紙すきには原料のこうぞをさらすため清流が必要で、当町の中央を流れる依田川沿いに数多くの「さらし場」があった。 
岐阜県 坂内村	製紙業	明治の頃、坂内では製紙が盛んで、各地区には「こど」と呼ばれる地下水を利用した、紙をそろえた「場」があり、現在では洗い場等として利用されている。
熊本県 三加和 町	和紙生産	江戸時代から明治にかけて和紙生産を主産業として栄えた町である。最盛期には850軒の和紙農家を有し、明治12年には、熊本の和紙生産の65%を占める一大産地として隆盛をきわめた。当時、町を流れる和仁川・十町川沿線には和紙の原料である「コウゾ」の洗い場・作業場が至るところに設けられていたという。生産活動や伝統工芸の拠点として水文化の栄えた町である。
岐阜県 河合村	山中和紙	富山県との境にある豪雪地帯に伝わる山中和紙。平安時代から行われてきている伝統工芸である。「雪晒し」によって白さが増すといわれる。
鳥取県 佐治村	因州和紙	因州和紙の産地であり、佐治川や谷川の水を使って現在も和紙がつけられている。
鹿児島 県蒲生 町	蒲生和紙	藩制時代から今に続く蒲生和紙の製造技術が伝承されている。昨今までの紙漉きでは、紙料の製造段階で、原料となるカジの木皮を煮た後のアク抜きとして後郷川の流れを利用していた。

(資料：長門町教育委員会「長門町の文化財」)

その他産業（伝統工芸・観光業ほか）


場所	名称	概要
福井県 小浜市	めのう細工	若狭めり、めのう細工には、水はなくてはならないものである。
島根県 横田町	かなながし 鉄穴流し	たたら製鉄が盛んな斐伊川では「鉄穴流し」と呼ばれる水流を利用した比重選鉱による砂鉄採取が行われていた。

次頁へ続く～その他産業

場所	名称	概要	
和歌山県かつらぎ町	川上酒	当地域の用水は、かつては、和泉（いずみ）山脈の伏流水を利用した「川上酒」を支えていた。	
岐阜県馬瀬村	鮎釣り	馬瀬川の鮎づりは戦前、戦争直後は、釣マニア、村在住の一部の間で行われていた。やがて観光漁川に転換。今も全国的な鮎釣り場としてにぎわいをみせている。	
岐阜県中津川	木曾川の観光船	市内を東西に貫流する木曾川の両岸は名勝地で明治の中頃から観光船が盛んに運行されていた。	

(資料 : <http://www.grn.mmtr.or.jp/~mizumizu/130.htm>)

洗い場

場所	名称	概要	
富山県黒部市	清水	生地地区では昔から湧き水を利用し、町内毎に共同洗い場として活用されている。湧水は「しょうず」と呼ばれて、今も果物を冷やしたり、洗濯などに利用されている。	
三重県飯南町	舟	谷水を引いて「舟」という洗い場に貯め、野菜を洗ったり洗濯に使ったりしていた。	
佐賀県多久市	カワド	集落の要所には井戸・カワド（洗い場）・風呂場等の共同使用場があったが、水道等の整備に伴い一部を残すのみとなり、昭和40年代前半頃、水のみ場・共同井戸・風呂・洗い場等は衰退した。	

(資料 : 国土庁「水の郷百選」)

次頁へ続く～洗い場